

ヒッポクラテス医学におけるパイディア<sup>1</sup>

木原志乃

古代ギリシアの *παιδεία* (人間形成、教育、教養) の伝統の中で、ヒッポクラテス派の人たちは、素人 (*ιδιώτης*) と専門家 (*δημιουργός*) の知の乖離について問題にし<sup>2</sup>、双方が持つべき技術知の内実を鋭く問い直したことで、極めて重要な歴史的 position にあると言えよう。アリストテレスが『政治学』において、素人と専門家について以下のように説明していることから、その区分はとりわけ医学の分野において当時一般化していたことがうかがえる。

もつとも、医者の中には、実際に治療にあたる者と、医術に精通した指導者と、第三に、当の技術について教育を受けただけの者がいる (実際、ほとんどあらゆる技術の分野にこの第三の部類の人々がいる)。そして、われわれは専門家にかぎらず、教育を受けただけの人々にも判断する務めを同じように割り当てているのである。 *ιατρός δ' ὅ τε δημιουργός καὶ ὁ ἀρχιτεκτονικός καὶ τρίτος ὁ πεπαιδευμένος περὶ τὴν τέχνην...* Arist. *Pol.* III, 11, 1282a4-6. <sup>3</sup>

治療にあたる者としては、技術を持った医者 (開業医である普通の医者)、熟練の指導者である医学研究者、医術を学んだに過ぎない教養人 (素人)、という三類型の中で当時理解されていた。この区別を前提にしたならば、ヒッポクラテス派の人々は一般教養と専門

<sup>1</sup> 本稿は 2019 年 9 月 15 日に埼玉大学で開催されたギリシャ哲学セミナーでの発表原稿に手を加えたものである。荻野先生、中畑先生、納富先生、今井先生、和泉先生、浜岡先生、田中先生、中村先生を初め、多くの皆様、また院生や学生諸君にもとりわけソフィストと医者との区分に関して貴重なコメントを幾つもいただき、改めて感謝申し上げます。『古い医術について』の扱いは慎重にせなければならぬ点を含め、とりわけ『術について』および『疾患について』をはじめとする個々の医学文書におけるソフィスト的要素および「素人」の位置づけに関しては、今回紙幅の都合もあり論じきれなかった点が多々あり、稿を改めるつもりである。

<sup>2</sup> この語の文書内での用例については本稿第 3 章参照。Jaeger 以降ヒッポクラテス医学における素人への啓蒙的な教育論を高く評価している研究者は多い。なお第 12 回国際ヒッポクラテスコロキウム (Universiteit Leiden, 24-26 August 2005) に基づき、ガレノスまでの古代医学における「教育」をテーマとした画期的な論文集も最近注目されている (Cf. Horstmanshoff, 2010)。

<sup>3</sup> 著者および著作名表記は Liddell&Scott, *A Greek-English Lexicon*, Clarendon Press に基づき、ヒッポクラテスの引用箇所はリトレ (L) の巻数、頁数、行数を記した。また、アリストテレス訳については岩波書店の新版全集を、プラトン訳については岩波書店の全集を、ヒッポクラテスはエンタプライズ社の全集訳を使用させていただいた。

性の知の隔たりをどのように埋めるべきと考えていたのか<sup>4</sup>。というのも前5-4世紀以降、医学の専門性は高まりつつあったが、他方で専門的知識を一般市民が理解できるよう指導し、その限りで医術が一般教養（*ἐγκύκλιος παιδεία*）としての地位を得たからである。それゆえ Jaeger も指摘する通り、彼らの医術は「ソクラテス、プラトンおよびアリストテレスの哲学へ通じる精神史の前段階であるだけではなく、彼らの当時の形式において初めて、単なる技術（Handwerk）の境界を超え、ギリシア人たちの生活の中にある主導的な教養文化的な力（Kulturmacht）へと至った」のである<sup>5</sup>。

そこで本稿では、ヒポクラテス派のこの *παιδεία* の独自性に注目し、教養の力の源に置かれた医術の本質を再考したい。まずは、「言葉（*λόγος*）の技術」の問題を取り上げ、第1章では、ヒポクラテスの医の教育をプラトンのテキストに基づいて確認し、さらには第2章では、医術がいかに関係と密接に結びついていたかを検証したい。そして第3章では、病の癒しにおいて、専門家と素人、さらには医者と患者の双方の「語り」がいかにあるべきだとヒポクラテス派の人たちが考えたかを考察する。癒しの言葉の持つ効果と危険性について、ヒポクラテス文書に示された独自の立場を明確にすることを通じて、医学の「語り」とその倫理性の問題に迫りたい。

## 第1章 専門職としての医術の教育：プラトンのヒポクラテス評価

古代ギリシア医学の教育現場、すなわち「医者」による指導の場が初期の段階<sup>6</sup>でどのようなものであったかは不明な部分が多い。わずかな資料から確認できることとしては、まず、革新的な教育の理念を掲げて前5世紀に台頭したソフィストたちに先立ち、またヒポクラテス医学によるコス派やクニドス派にも先立ち、既に前6世紀後半にはクロトンとキュレネの地で、専門的な医学派の「学校」が発足したことである<sup>7</sup>。とりわけクロトンに関しては、ソクラテス以前の自然哲学の展開として、ピュタゴラス派の影響の下での医学教育機関であったと推測される。また、当時ポリスにおける医者の活動は多岐にわたっていて、体育教師（*γυμναστής, παιδοτρίβης*）<sup>8</sup>や薬草採集者（*ρίζοτόμος*）

<sup>4</sup> 専門知に対する一般教養知には二つの意味があることを前提にしなければならない。すなわち一方では専門と対極にある教養だが、他方では専門がそこから形成され、その延長上にあるものとしての教養もある。藤澤（2001）参照。

<sup>5</sup> Jaeger(1959), III, 11, (1982), III, 3.

<sup>6</sup> 既に線文字 B に医者を示す文字が見られ、ホメロスにも医師が描かれる。Cf. Hom. *Il.*, 2, 731ff. (4,193ff. 11, 598f. 833ff.) Cf. Pi. *P.* III.

<sup>7</sup> Puschmann, et al. (1902-5) pp.191ff. Cf. Hdt. III, 129-133 ではクロトン出身デモデケスに関して…ダレイオスの足関節脱臼の見事な治療を行ったことや、クロトンの医学者たちの見事な評判についても記されている。「このことがあったのは、ギリシアの中で医師としてはクロトン人が第一、キュレネ人が第二と称された頃にあたる」（ヒポクラテスの話もコス島への言及もなし）。

<sup>8</sup> *παιδοτρίβης*（体育指導者）と *γυμναστής*（競技トレーナー）の違いは当時あまり明確でなく、

なども医の指導や治療に当たっていたようだが、中には魔術者やいかさま師（γόγης）も街に多くいたことが知られている。他方、古くから伝承された神話的治療としては、治癒神アスクレピオスへの信仰に基づくものが各地に拡がり始め、その聖域（Ἀσκληπιεῖον）での処置が一般に行われていた。この民間信仰はテッサリア地方から始まり、紀元前5世紀にエピダウロスにおいて最初の隆盛を迎え、アテナイをはじめとするギリシア全土にも拡がったものであり、医者はこのアスクレピオスの子孫たち、すなわちアスクレピアダイ（Ἀσκληπιάδαι）として治療に当たった。古代ギリシアの医師たちは、公認の資格制度を持っていなかったため、地縁・血縁に基づいた職業的な結社、言わばギルドを形成し、各地を遍歴しながら、治療と後継者の育成に当たったのである。様々な治療者がそれぞれに活動し、次第に各地にセクトが形成され始める中、医術が学問としてのアイデンティティを確立し始めるのは、周知のようにヒッポクラテス派の活動による。まず、当時の彼らの教育活動を知る手がかりとして、プラトンのテキストを取り上げ、いくつかの重要な論点を確認するところから始めたい。

プラトンの『プロタゴラス』は、おそらく「ヒッポクラテス<sup>9</sup>」の名前に言及している最古のテキストである。その言及からは彼がアスクレピアダイとして当時報酬をとって医学を教えていたことがわかり、彫刻家の代表であったポリュクレイトスやペイディアスらと並び、明確な専門領域を持った技術者として知を伝授していたことが読み取れる。

「...アスクレピオス派の医者、コス島のヒッポクラテスのところへ行って、君自身のために報酬として金を払うつもりでいたとする。」...「『自分が何になろうというつもりなのかね』と聞かれたら？」「医者になるつもりなのだ、と答えるでしょう」

Pl.Prt.311B-C

ここでプラトンは、ヒッポクラテスの教育をソフィストの教育と対比させ、専門と教養の学びの区別を導入する。すなわち医術を学ぶことは専門家になるためだが、プロタゴラスから弁論術を学ぶことは、読み書きや堅琴の先生、体育の先生のもとに学ぶのと同様、専門家になるというより「教養」を身につけるためであることが確認され、以下のように述べられる。

...自分が本職の師匠になる目的で、専門的技術として学んだのではなく、一個の素人としての自由人が学ぶにふさわしいものとして、一般的教養のために学んだわけなの

---

プラトンは共に *ιατρός* と区別せずに扱っている。一方ヒッポクラテスは彼らを *ιατρός* と区別し批判的に捉えていた。

<sup>9</sup> ソラノスの『ヒッポクラテス伝』では、ヒッポクラテスは父親ヘラクレイデスの元で医学を学んだ後、医学者ヘロディコスに師事したとあり、弁論家ゴルギアスや哲学者デモクリトスにも師事したとされている。そして自らは、コスの町の中央にあるヒッポクラテスの木と呼ばれるプラタナスの巨木の下で弟子たちに医学を教えたと伝えられている。

だ。τούτων γὰρ οὐκ ἐκάστην οὐκ ἐπὶ τέχνην ἔμαθες, ὡς δημιουργὸς ἐσόμενος, ἀλλ' ἐπὶ παιδείᾳ, ὡς τὸν ἰδιώτην καὶ τὸν ἐλεύθερον πρέπει. *Prt.* 311C

続く箇所では、この学びの区分についての議論は、学びを他者に委ねることの危険性の議論へと移行する。すなわち、ソフィストに教えを受けることで、「人間として国家社会の一員として持つべき徳」を手頃な値段で身につけることが果たして本当にできるのか、とソクラテスによって問いかけられている。そしてそれがいかに重大事であるかを説明する際に、医術が例に挙げられる。身体を誰かに委ねて、それが良くなるか悪くなるかの危険をおかさねばならない場合には、我々は散々思案を重ねるはずである。それに比べて、より重大事である魂の世話を慎重に思案しようとしするのはなぜかと問いただされる。ここで、プラトンはソフィストの教育批判を行うために医術を導入し、医者と患者の治療のあり方 (*θεραπεύειν*) の問題に重ねて、自らの魂の世話 (*θεραπεύειν*) の議論を展開している。

また『国家』では、ヘロディコス以降の教養の欠如について嘆かれて、古くから続く「アスクレピオスの流れを汲む人々」の伝統が高く評価される。すなわち、教養を身につけているべき市民たちが、医者や裁判官などの他者の厄介にならなければならない状況(=一般市民たちの教養の欠如)が以下のように批判されている。

しかし、一般の名もない人たちや手職人たち (*τοὺς φαύλους τε καὶ χειροτέχνας*) ばかりか、自由教育を身につけたと称する人たちまでもが (*τοὺς ἐν ἐλευθέρῳ σχήματι προσποιουμένους τεθράφθαι*)、最高の腕を持つ医者や裁判官を必要としているということ、——いったい一国における教育が悪しき恥ずべき状態にあることを告げる証拠として、これよりももっと大きなものを君は見いだすことができるかね。PI.R.III 405Aff.

病に苦しむ存在として、様々な病名をつけられ、終始つきっきりで面倒をみられることよりも、良き国家における自らの仕事に従事するために、日々の健康を自ら維持することが重要である。ところが、アテナイの実情は、次の引用が示唆するように、昔はなかったような「贅沢病」(風膨れやカタル)などが瀰漫している。

怠惰やわれわれが述べたような生活法のために、ちょうど泥沼のように水(体液)の流れと風(ガス)が身体中に充満し、あの気の利いたアスクレピオス派の医者たちをして「風膨れ(鼓腸)」だとか「たれ流し(カタル)」だとかいった名前を、それらの病気につけざるを得ないようにさせるということは、恥ずべきだと思わないのかね。...そんな病名はアスクレピオスの時代にはなかったものなのだ。PI.R. III 405Cff.

ここでプラトンが指摘するのは、良き国家における理想的な医のあり方として、一般教養の次元において、心身の自己管理が重要であるということである<sup>10</sup>。

さらに、『ゴルギアス』および『パイドロス』では、弁論術を批判するために医術が導入される。問題となるのは、身体を扱う術が医術であるとしても、魂を扱う術を果たして弁論術とみなしてよいかである。そして以下のような諸技術との対比・区分に基づいて、弁論術の本質、すなわち見かけや快を扱うもので、何ら理論的知識を持たないものであることが明らかにされる。

化粧法が体育術に対する関係は、ソフィストの術が立法術に対する関係に等しく、また料理法が医術に対する関係は、弁論術が司法術に対する関係に等しいということである<sup>11</sup>。Pl.Grg. 465C

技術のあり方としては、医術と弁論術とは、何か同じ事情にあるようだ。…医者の場合には身体の本性を、弁論術の場合には魂の本性を——分析しなければならない。つまり医術とは、身体に薬（*φάρμακα*）と栄養を与えて健康と体力をつくる仕事であり、弁論術とは魂に言論（*λόγος*）と、法にかなった訓育とを与えて…。Pl.Phdr. 270Bf.

プラトンによる、このような医術と弁論術とのアナロジカルな対比の議論には、周知のようにゴルギアス『ヘレネ頌』が踏まえられている。魂が言葉の技術によって操作可能なものであることを、自らの言葉の技術で説得して見せようとする際に、引き合いに出されたのが医術の処方する *φάρμακον* の力であった。

言葉（*ὁ λόγος*）の力は魂の状態に対し、薬（*φάρμακα*）の組成が身体の本性に対するのと同じ比例関係にある。さまざまの薬は、各種の体液を身体から吐寫せしめ、あるものは病気を癒し、あるものは生命を断つ。これと同様に、言葉もまた、あるものは苦しみを、あるものは喜びを、あるものは恐れをもたらし、あるものは聴くものの志気を高め、あるものは邪悪な説得によって魂を呪縛し麻痺させる。Gorg.Hel. 82B11 (14)DK

<sup>10</sup> この主張、すなわち身体の自己管理するように導き（身体の世界）、患者の自立を促すべしとする医の教育はヒッポクラテスの医学文書において確認でき、本稿第3章にて考察する予定である。

<sup>11</sup> (1) 魂を維持して世話する術である立法術：ソフィストの術＝身体を維持して世話する術である体育術：化粧術

(2) 魂を治療して世話する術である司法術：弁論術＝身体を治療して世話する術である医術：料理法

身体は毒にも薬にもなりうる *phármakon* によって作用を受け、良い方向にも悪い方向にも医術によって操作される。それと同様に、魂は言葉の力で操作され、善にも悪にも動かされうる。この『ヘレネ頌』という作品を通して、ゴルギアスによって弁護される女性ヘレネは弱者として扱われ、また彼女の魂は言論によって説得される聴衆である我々自身とも重ねられる。すなわち責を問われぬよう弁護されるとともに、強者の力、言葉の力によって支配され、魂の能動的主体性も内的価値も剥奪されるのである<sup>12</sup>。

ゴルギアスによるこのような弁論術と医術のアナロジーを踏まえ、プラトンはいわゆる「テクネー・アナロジー」の議論を通して、倫理的知識にとっての理論的モデルとして医術を導入し、一方で技術としての弁論術の位置付けを問い直したのである。そこにおいてはゴルギアスによる力の誇示とは対照的に、本来の言葉の技術は倫理的な知をすでに内に持つものであるゆえ、その対象である魂は外部からの力によって悪しき仕方でも操作されることはなく、力は知を求める主体（魂）に内在化したかたちで捉えられることになる。すなわちプラトンはゴルギアスの主張する「技術＝価値中立的」という当時の一般的風潮に対向し、真なる技術は倫理的知識と同様でなければならないと考えた。技術にはそれを行行使するとき常に「よさ」が念頭に置かれている必要があり、術の持つ特性は以下のように解される。

- 1) 技術は、対象と処置に関して、自然本性 (*phúsis*) を知り、原因 (*aitía*) を知り、理論的説明 (*lógos*) を与えることが可能であること。
- 2) 技術は対象の快や見かけ上のよさではなく、実際によいものを目指すものでなければならない。

ヒッポクラテス派においても、プラトンと同様、医術こそが真なる術としての資格を持つものであることが様々な文書内で主張され、論証されている。例えば、『神聖病について』では神話的説明からの解放が目指され、自然を自然によって合理的に説明することの重要性が説かれ、『古い医術について』や『術について』では偶然に帰することが批判されている。病には自然的原因があるのであって、観察と経験に基づいて、合理的に説明することこそが彼らが目指した医学的方法論であったと言えよう。そして医術が患者の身体および魂をよい方向へと導くように目指す限りで、その知は倫理性を備え、プラトンの哲学的問答法と近接したものであったはずである。『パイドロス』の上につづく議論では以下のように語られる。

ソクラテス「ところで、魂の本性 (*ψυχῆς φύσις*) を理解するのに、その全体の本性を離れて (*ἄνευ τῆς τοῦ ὅλου φύσεως*) 満足に理解することが出来ると思うかね。」

パイドロス「いやしくもアスクレピオス派の医学者、ヒッポクラテスの言葉を多少

<sup>12</sup> *lógos* (男性名詞) による *ψυχή* (女性名詞) 支配のこの構造は *logocentrism* であり、*phallocentrism* である。中畑 (2000) 参照。

なりとも信じなければならぬとすれば、身体についてもあなたが言われた方法をとらないと、その本性を理解するのは不可能だとのことです。」Pl.*Phdr.* 270Bff.

ここで言及された「全体の本性 (τῆς τοῦ ὅλου φύσεως)」という言葉は、ヒポクラテスの教えにおいて重要な意味を持つ。彼ら医学派によれば、身体内の体液の混合状態によって健康と病が判断されるが、それは身体内部の釣り合いでもあり、自然環境との釣り合いでもある。釣り合いは、その全体論的な視点からしか把握できないもので、決して外部に何らかの規範が存在するわけではない。すなわち、医術が身体を扱う際に「宇宙全体」が視野に入っていないとすればならぬとする医学派の教えをプラトンは正確に踏まえている。プラトンにとっては、真なる技術としての哲学的問答法には全体の総合的視点と分析的視点が必要とされ、ソフィストの弁論術にはそれが欠けており、その基準に適っていたのがヒポクラテス医術であったのである。

以上、ごく断片的に概観したに過ぎないが<sup>13</sup>、プラトンのいくつかの著作において、ヒポクラテス派の教説が的確に踏まえられ、弁論術との対比のもとに医術のあり方が高く評価されていた。そして身体世話についての医の教育が、哲学で重視された「魂の世話」に重なるものとして導入されていることが確認できた。

## 第2章 ソフィスト思潮とヒポクラテス文書：レトリカルな「演示」の意図するもの

しかし、ヒポクラテス文書にはソフィスト的要素の強いレトリカルなものもいくつか見られる。例えば『術について』『体内風気について』は、とりわけソフィスト的な特徴が明らかであり、これらの文書の著者は *ιατροσοφιστής* であると称されてきた<sup>14</sup>。また、Festugière によれば、この2文書に『古い医術について』『人間の自然本性について』が加えられ、これらがソフィスト的効果を狙った“*programmatic speech*”であるとされている<sup>15</sup>。以下では、これらの文書に見られるソフィストの特徴について明らかにしたい。

まず、興味深いのは、当時の医学知識が口頭でプレゼンテーションされることが前提とされている点である。例えば、『古い医術について』冒頭では、「医術に関して、これ

<sup>13</sup> 『饗宴』でのエリュクシマコスによるエロース讃美、『国家』III, 408-9、『法律』なども参照されたい。

<sup>14</sup> この名称に関して批判的なコメントを付しているのは Jouanna (1988), 48. Jouanna (2012) によれば、これらの著作がゴルギアス『ヘレネ頌』と同じイオニア方言で書かれていることは、前5世紀の弁論術の展開と関係付けられる(52)。また、『術について』の A. Rademaker や Agarwalla の研究を参照。

<sup>15</sup> 他にも『神聖な病について』、『空気、水、場所について』、『骨折について』、『予後』などでもレトリック要素は指摘されている。Festugière (1948) によれば『空気、水、場所について』『神聖な病について』『子供の自然本性について』『疾病について 4』『婦人病』にもその傾向が見られると指摘されるが、これらの詳細に関しては稿を改めたい。

までに語ったり書き記したり試みてきた人々（‘Οκόσοι ἐπεχείρησαν περὶ ἰητρικῆς λέγειν ἢ γράφειν）は、自分たちの論拠の前提に…」と記述されており、「書くこと」と別に「語ること」が挙げられている。また、別の箇所では、医者と並べて知者たちに言及され、書くのみならず語ることに触れつつ、医者たちが思弁的な哲学に傾くことに批判が加えられている。

ある医者や知者（ソフィスト）たちは次のように説いている。 Λέγουσι δέ τινες καὶ ἰητροὶ καὶ σοφισταὶ...そのような知者（ソフィスト）や医者が、自然について語ったり書いたりしてきたことは、絵画術とも違うが医術とはもっとも遠く隔たっていると私は考える。 Ἐγὼ δὲ τουτέων μὲν ὅσα τινὶ εἴρηται σοφιστῇ ἢ ἰητρῷ, ἢ γέγραπται περὶ φύσιος, ἥσσον νομίζω τῇ ἰητρικῇ τέχνῃ προσήκειν ἢ τῇ γραφικῇ. Hp.VM (L1, 620, 7ff.)

ここで気をつけねばならないのは、比較的古い時代に書かれた『古い医術について』では、哲学者とソフィストは未だ対立的な構造になかったであろうという点である。すなわち医学文書内にある程度の時代的な幅を前提としつつ、ここではソフィストという用語の使用には後代に定着した職業教師集団の要素を読み込むべきでなく、知者全般を示しているとして理解すべきであろう。その上で優れた良き医者アイデンティティを確立するために、書いたり語ったり活動のあり方を反省的且つ批判的に述べているとみなすべきである。

さらに『人間の自然本性について』冒頭では、「人間の自然本性について医学の領域から隔たった人々の話を聞き（ἀκούειν）慣れた人々」（L6, 32, 1ff.）に警告が加えられ、「聴衆」を前提にした彼らの論争について、以下のように記されている。

彼らの論争をそばで聴いていると、誰でもよく分かることであろう。実際、同じ論争者たちが同じ傍聴者たちを前にしてお互いに論争するとき、同じ人がつづけて3回とも議論に勝つことは決してなく、あるときはある者が勝ち、またあるときは別の者が勝ち、あるときは、群衆を前にしてたまたま舌がいちばんうまくまわった者が勝つといった具合である。 Hp.Nat.Hom.1 (L6, 32f.,17ff.)

このような哲学者やソフィストたちの、人間とは火や水や空気や土であるとする主張がはっきり退けられる。

存在するものが何か単一なものであり、これが一にして全体であると彼らは主張している。だがその名称の点では同意していない。...ものごとをよく理解できないために、自分たちが議論する用語のなかで、自分自身の説をくつがえし、メリッソスの論の正当性を示す結果になっている。 Hp.Nat.Hom.1 (L6, 32f., 9ff.)



著者は一と多を同時に主張する矛盾を指摘したメリッソスに賛同し、彼らが自己矛盾しているがゆえに論争しても決して三度続けて勝つことはないというのである。それに続く議論では、この論争に医者も加えられ、医者の中にも一なるものから人間を語る人々がいる点が批判される（「さて、医者のごとにうつると、彼らのある人は、人間は血液にほかならないと主張し、またある人は、人間は胆汁であると言い...」）。すなわち哲学者やソフィストの議論の延長上で医術に関しても公的なディベートの場を前提にして論じているのである。

さらに『術について』では、医者のご目的が論争的となり、その誹謗中傷的な傾向について言及される。

いろいろな術の悪口を言うことを自分の術としている人たちがいる。ところが彼らは、私の言うそのようなことをやっているつもりはなく、自身の探求獲得した知識を示しているのだと思っている。...醜い言葉で他人の発見をけなしたり、何一つ間違いを正さず、学識のある人の発見を学識のない人の前で中傷するのは、もはや知性の求めることでも仕事でもない。それはむしろ邪な性質の現れか術のないことだと思う。

*Hp.de Arte* 1 (L6, 2ff.)

しかし続く箇所では、その論争自体が必ずしも否定的に捉えられているのではなく、むしろ術を強固なものにするための契機であるとも解され、本来の意味での「術」が問い直されている。

以下の議論は、医術に対してこのような攻撃をする人々に反論しようとするものである。これは論敵によって逆に勇気付けられ、擁護する医術によって反論の道を見出し、また教えを与えてくれた知恵のおかげでできることなのである。*Hp.de Arte* 1 (L6, 2ff.)

『急性病の養生法について』では、コス派の立場からクニドス派の見解に対して論争的に語られている。

『クニドス派の教本』と呼ばれるものを著した人たちは、...患者が告げないことで医師がさらに付け加えて知っておくべき事柄については、それが病気によって異なり、なかには診断を下すうえでの重要なことも含まれているにも関わらず、彼らは多くのことを見過ごした。*Hp.Acut.*1 (L2, 224ff., 1ff.)

このように、医学著作の多くが敵対主義的な言及に満ちていることは、例えばローマ期のガレノスをみても明らかであり、自説を擁護すべく場当たりの他の見解を批判攻撃

する姿勢ははっきりとみて取れる。

以上で確認したように、医者は治療行為とは別に、専門家ではない聴衆を前に、口頭で、あたかもソフィストたちの活動と同じ「演説」(ἐπιδείξις)を展開していたかのようであり、いくつかの文書がそれを裏付ける証拠となっている<sup>16</sup>。では、医者が自らの学説を演説し論争で勝つことを重視したのはなぜか。論争的な医学書について、Ducatillon は以下の四つの可能性を示唆している。

- 1) 哲学に対する論争、2) 他の医学派の理論や実践に対して自説を擁護する論争、
- 3) 非合理的な医学や偽医者に対する論争、4) 術を擁護するための論争

哲学への論争、医学の学派間での論争<sup>17</sup>、術そのもののために必要な論争、これら全ての論争を通して確保されるのが、「医術のアイデンティティ」である。そして医者集団の内外に「医術の持つ本来の価値」をアピールするために自覚的に言葉で武装し論争的なスタイルが取られていたと思われる。すでに述べたように、ヒポクラテス派たちは伝授された医学知識を地縁・血縁関係内に留め、それを外部に漏らさないとする「誓い」の言葉も残されている<sup>18</sup>。そのような閉じた教育のあり方も、職業集団としての自律性を高め、社会に認められることに通じ、集団としての価値をアピールする上で必要なことであった。

ロイドも指摘するように、これは現代の大学教育にも共通する特性であり、個々人や集団の間に存在する「競合性」(competitiveness)を通して、知の「価値」を示すことが求められてきたことに呼応している<sup>19</sup>。

哲学者として、もしくは医者としてさえ、名をなすには、しばしば奇抜な仮説や、逆説的な議論を展開して、自分に注目を集めなければならなかった。同時に、自分の同時代人たちが判定者であった。肝心なのは、自分について彼らが抱く印象であった。

<sup>16</sup> Jouanna (2012) は口頭と記述のカテゴリーの区別を内的参照によって判断する (内的参照がなされている文書は後者である。例えば『骨折について』25 「ところでそれぞれの処置からどのような結果が生ずるか、ということは先の記述の中でも述べておいた」参照)。この口頭演説著作に共通する特徴として “φημι” (私は主張する) という一人称の動詞が多用されている点も重要である。「書簡」を除く 49 例の中、およそ 8 割の 39 例が口頭演説を想定できる著作グループに属するものである。

<sup>17</sup> セクト間の典型的な敵対関係については、ガレノス参照 (「このように相互に競い合っていた三つの医学集団があったのである。コス派がもっとも数が多く優れていたが、クニドス派もそれに匹敵し、イタリア派もまたかなり重要な集団であった」10, 5-6K)。

<sup>18</sup> Cf. 『誓い』参照 (「この術を授けてくださる師を私の両親に等しいものと見なし、師を共同生活者と見なし、そして師が必要なものに困窮していれば自らと分配するようにし、また師の子孫を私の兄弟と等しいものと考えて、その者が学びを必要としていたら、報酬を得ることなく師弟契約書をとることもなくこの術を教えます。そして訓戒、伝訓、その他残りのすべての教えを、私の師の子孫と私の息子たちとで分配し、また契約書に記して医者の方に従うことを誓う弟子たちとで分配し、他の誰にも伝授しません」)。

<sup>19</sup> Lloyd (2004), 145.

教師であれば、その人が施す教育それ自体が、それ自身の言葉で自らを正当化し、それ自体のゆえに価値があることを示さねばならなかった。

この「価値」、すなわち倫理知の根拠をいかに示すかが、ソフィストと哲学者の対立構造に見られる分水嶺であり、ヒポクラテス医学文書にもその問題が浮き彫りにされていたのである。確かに医学文書には、ソフィスト的言葉の技術を肯定し受容したものと、そうでないものが混在しているように思われる。つまり一方では医術の価値を示すために、言葉の力を誇示し論を競い合い、議論に勝つことが目指された。それゆえ、ある面では聴衆の思われや評判を考慮したレトリカルでポレミックなものでもあった。しかし、文書の内容は単なるスタイルに留まらないし、決して医学の内実から離れたものではなかった。ソフィスト的な相対主義的立場にも通ずる表現が多用された文書もいくつか見られるが、それは表面的な形式の上でのことではない。例えば、『養生法について』および『栄養について』でのヘラクレイトスの言明がソフィスト思潮と結び付けられて理解されてきた。

なぜなら、すべてのものは、類似していないが類似しており、すべてのものは、一致しないが一致し、語らないが語り、分別を持たないが分別を持ち、おのおののもののあり方は、調和しているが調和していないからである。それと言うのも、習慣と自然本性...は一致しながら一致していないからである。Hp. *Vict.* I, 11 (L6, 486, 12ff.)

価値判断を相対化するこのような叙述は、『両論』(90, 3)の議論と対応関係にあると指摘されてきた。しかしながら、同一のことが議論の上で相反する二つの方向から価値づけできるとする『両論』と比べて、『養生法について』ではそのような社会的な価値づけの不確かさは関心の中心とはなっていない。ここで言われているのは、予見を可能にする医術のあり方、すなわち患者を取り巻く自然環境に配慮し、身体的な状態を観察しなければならないという意味での習慣と自然本性の一致である。医学文書の著者は、自然本性が人間的思惑と一致しつつも一致しないこと、いいかえれば自然本性を知ることの困難さを十分に認識していたのである。その限りで安易に価値を固定化しないとする根本思想に通じる表現であった。レトリカルに見える主張も、単にスタイルだけのものと読まれるべきではなく医学文書の文脈に即して読み解く必要があるのである。

### 第3章 医者と患者の「語り」：素人と専門家を繋ぐもの

以上見てきたように、医学文書の個々のレトリックの内実については慎重に吟味する必要があるとして、言論の力を身につけるべく教育の実践を目指したソフィスト思潮と近接した仕方で医学派のアイデンティティが形成され、また医術の学びが説かれたことは

明らかである。聴衆を惹きつける手腕が医者に必要とされた。それは、専門性を保持しつつ、社会の承認を得て職業集団の自律性を確保するための手段であった。

しかし一方ではこの言葉の技術を通じて信頼を得ることは、社会的名誉だけでなく、個々の患者に対する場合に何より必要とされてきた。ヒポクラテス医学において個々人の治療の場面において、「語り」(narrative)に注目され、言葉の技術が積極的に取り入れられてきたことは多くの資料から確認できる。医者と患者のコミュニケーションは、問いと答えの対話から始まり、医者は尋ね、記憶(記録)する。観察に基づく診断とともに、言葉を通して過去のことも理解した上で予言する。『予後』冒頭では以下の通り語られる。

医者が病気の予測を仕事としていることは非常にすばらしいと私は思う。実際、病人のそばにいてその症状の過去と未来の様子をあらかじめ知り予言して、患者がつい言洩らしていることまですっかり説明してやれば、病人のことをよく知っているといっそう信頼されるようになり、こうして人々はあえて自分の体を医者に委ねる気にもなるのである。...というのも、そうすれば当然敬服され、名医となるであろうから。

Hp.Prog. 1 (L2, 110, 1ff.)

さらに『疾病について』では、病気について双方の語りに虚と実が入り乱れる点が踏まえられ、言論に慎重である必要性が語られている。

医療について適切に質問したり、質問に答えたり、適切に反論をしたい人は、以下のことをよく考えて見なければならぬ。まず、人間のあらゆる病気は何がもとになっておこるのか。...医師は患者に、患者は医師に、それぞれどんなことを憶測で語ったり行ったりするのか。また、どういうことは術にかなう正確さで語られ、行われるか。...以上のことをよく考慮した上で言論(λόγοι)にはよく気をつけなければならぬ。Hp.Morb.I, 1 (L6, 140f., 1ff.)

また、『古い医術について』では、先に示したように抽象的で思弁的な哲学の方法論が批判され、それに与する新しい医術ではなく古い医術が見直されており、比較的初期に書かれたこの書では、医者は「素人にわかるように」語らねばならない点が明言されている。

ところで、とくにこの術について語る人は、思うに、一般の素人(δημότης)にもよく知られていることを言わねばならぬ。というのも、そういう素人自身が病んだり苦しんだりする病気以外のことを探求したり論じたりすることは、本来の医術にふさわしいことではないからである。Hp.VM, 2 (L1, 572, 18ff.)

...もししかるべき人によって発見されて説明を受けるならば理解するのはたやすい。誰でもそれぞれ自分にふりかかったことを人から聞くときは、ただそれを思いおこすことだけでことが足りるからである。しかし医者素人に話を理解させることもできず、聞き手を納得させることもできないならば、医者は真実をつかみそこなったことになる。Hp. *VM*, 2 (L1, 574, 3ff.)

また、『疾患について』でも、素人が知を持っている必要があると何度も強調されている。

聡明な人ならば、人間にとってもっとも価値のあるものは健康であるということをよくわきまえ、疾病の際には自分自身の判断で自分を助けることができなければならない。また、医者が自分の体に対して言ってくれたことや処方してくれたことをはっきりとわきまえることができるのでなければならない。これらの点の一つ一つを、一般人 (*ιδιώτης*) に相応な程度に知っていなければならない。Hp. *Aff*.1 (L6, 208, 1ff.)  
一般の人でも次のことを知っていれば癒すことのできない疾病に陥ることが、知らない人より少ないであろう。疾病を重くて長期にわたるものとしがちなのは些細な外的原因に他ならないからである。Hp. *Aff*. 33 (L6, 244, 10ff.)

ここでの *ιδιώτης* については、経験の浅い一般の医学者という意味にとる解釈もあり、この文書は医師でない者が読むための独自のものであると近年新たな指摘がなされてもいる<sup>20</sup>。そのような研究動向を前提にしつつ、この語を一定の医の教育を獲得しようとする素人のことと理解して差し支えないであろう。この *ιδιώτης* という語は、ヒポクラテス文書内に全体として26箇所言及されているもので、*δημότης* と同じ意味で用いられている<sup>21</sup>。これらの語は、限られた著作に集中して用いられ、素人への啓蒙の主張は一貫している（『古い医術について』4箇所、『術について』6箇所、『急性病についての養生法について』4箇所、『疾患について』5箇所 etc.）。そして、一般の素人でも医術に関する事柄を探求したり論じたりしなければならない理由は、人間が苦しみを身に受ける存在 (*Homo patiens*) だからということであろう。自分の身体について知り、良い方向へと導くことができることは、生きる上で何よりの重大事であるゆえ必要であるというのである。

しかしながら「医術の道は長く険しい」（『箴言』1, 1）の言葉から推測されるように、未熟な素人と術に熟達した者との違いが大きいのも事実である。

<sup>20</sup> Cañizares の主張参照。また L. Dean-Jones によれば、これまで学生向けに書かれたと解釈されてきた『医師について』は初心者指導者のための教育的な文書だと主張されている (Cf. Horstmanshoff, 2010)。

<sup>21</sup> *δημότης* という語は *δημος* に由来し同区に住まう人々の意味から、やがて *ιδιώτης* と同義で用いられることになった。

実際、医術については誰しも全くの素人ではなく、是が非でもそれを用いなくてはならない事情から皆それなりの知識をもっているのだから、特にその技能家と呼ばれるには当たらないわけである。しかしそうは言っても、医術の発見は相当大変な幾多の探求と技術をまっけて成就される仕事である。Hp.VM, 4 (L1, 578f., 12ff.)

素人でも誰しもが医術について「それなりの知識を持っている」のは、生活の中での自分の身体への対応に迫られてということである。この知識差は多様であり、医者の中でもその能力にも大きな差異がある中で、素人と医者もその範囲内で語ることができる。そして医者舵取りに例えて (Cf. Pl.R, 332, 341)、深刻な病にかかった際に医者としての能力が試されることに言及されてもいる。だからこそ本来の術を身につけて医者になるためには、その素質を持った者が長い年月をかけて教育を受ける必要があると説かれているのである。医術の専門性の確保と教育の必要性に関しては、以下の通り強調されている。

ただしそうした治療法は、…その〔発見したいと思った人の〕中でもそれだけの能力のある人によって発見されてきたのである。そしてきちんとした教育(παιδείη)を受け、立派な資質(φύσις)を備えた人こそ、そうした能力を持っている。Hp.de Arte, 9 (L6, 16, 12ff.)

医術の知識を身につけて自分のものにしようと思うものは、次の条件を満たしていなければならない。すなわち、生まれつきの資質、教育、および教育にふさわしい場所、しかも幼少からその教育を受けること、それから勤勉と年月である(φύσιος· διδασκαλίας· τόπου εὐφύεος· παιδομαθίης· φιλοπονίης· χρόνου.)。Hp.Lex, 2 (L4, 638, 11ff.)

医学文書の特徴としては、病の名称の造語や合成語も見られ、専門用語を用いて語られている面もあり、その点では一般の素人にとっての難解な専門化の傾向ももちろん見られる。しかし、医者が患者と向き合う際に、患者本人に自らの病を理解してもらうよう言葉を丁寧に選別し、誤った情報を伝えないよう慎重に説明しなければならないということが文書内に明言されている点は重要である。

医術において…不適切なこと。ある病気を別の病気であると言う。重病を軽い病気であると言う。軽い病気を重病だと言う。助かる患者なのに助からないと言う。助からない患者なのに助かると言う。…なおせるのになおせないと言う。なおせないのになおせると言う。以上は認識の点で不適切なことである。Hp.Morb.I, 6 (L6, 150., 6ff.)

このように、医者は「語り」に配慮し、必要な情報を伝え、不必要な情報は伝えてはならない。治癒困難な患者に希望を持たせる言葉をかけるのも禁じられる。そして何よりも

患者自身が知を持つよう導き、促す必要があるということである。病の癒しにおいて、専門家と素人、さらには医者と患者の相互の知は、隔たりこそあれ、善へ向けて癒す存在として共通基盤にあり、それゆえ「語り」のコミュニケーションを通して知を共有することが目指されるのである。癒しの現場では、近年、哲学の領域での物語性へのアプローチとも関連しつつ、医療人類学や臨床心理学の分野でも、いわゆるナラティブ・アプローチが導入され、いま改めて「語り」に注目されている点にも、最後に言及しておきたい。

理論や経験や権威者の判断ではなく、確固とした疫学的証拠に基づき、科学的に最良の判断をすべきであるとする「根拠に基づく医療 (Evidence Based Medicine)」の考え方が、急速に普及していった。しかしそれを追いかけるようにして、1990年代後半には、「根拠」「統計」「科学性」に対してパラダイム・シフトを要求する「物語に基づく医療 (Narrative Based Medicine)」という考えが現れた。そこでは人間はそれぞれ自分の「物語り」を生きており、「病気」もまたその物語りの一部である<sup>22</sup>。

すなわち病の問題は語りと関わりが深いもので、「語り」を通して「患者自身の視点から生きられた経験である病」に注目し、生活世界の中に生きている人々の語りに耳を傾けることからケアが始まるとされている。基本的に患者の語りを丁寧に聞くことに治療の主眼が置かれがちであるが、ここで重要なのは、患者の側だけではなく、患者と医者が互いの語りに耳を傾けつつ、共に新たな物語を作り出してゆくという点であろう。病を語ることは、その事象を自ら捉え直す作業であり、それは患者のみに限らず、医者側も組み込まれた一連の治療に向けてのプロセスである。しかし社会構築主義の立場から治療が語りのみに集中してしまうことに危険もある。ともすれば、それは患者に不安や楽観を植え付け、あるいは患者の語りの虚が新たな病を生み出す。癒しに導くはずの言葉が、逆の方向に作用しもするのである。

語りの内容にも慎重であらねばならないし、語りのみに偏る治療にも問題がある。ヒポクラテス医学においては、自然学的な基礎理論としての体液説に基づいた合理的な治療が中心にあり、語りへの過度な期待はなかった。ヒポクラテス医学から離れると、当時の治療には、不合理な要素がかなり多くあったことが知られている。プラトンやアリストテレスですら、言葉による治療について、呪(まじない *ἐπωδή*) や浄化(*κάθαρσις*) の効果を踏まえて、自覚的な仕方でも一歩踏み込んで語っていたこともテキストからうかがえる<sup>23</sup>。これと比べると、ヒポクラテス文書には治療の実践にそのような種類の言葉の効果を用いることはなく、むしろ自然の客観性に基づきながら治療を行い、魔術や根拠のない治療にははっきりと距離が取られていた。

<sup>22</sup> 浜渦(2009), 95ff.

<sup>23</sup> この点に関しては、Entralgo(1970)参照。

一方、医者から患者への抑圧的な語りが効果的な治療を損なうことについては、ヒポクラテス文書に示されていた。医者を信頼して身を委ねることもなければ、言葉を交わすこともないままに医者の判断が患者に押し付けられる。これはプラトンが『法律』で示した奴隷同士の関係のようである。

そして、そうした（奴隷の）医者は誰も、一人一人の奴隷の病気それぞれについて、何かの説明を与えもしなければ、受付もしない。むしろ、経験からして良いと思われる処置を、あたかも正確な知識を持っているかのように、僭主さながらの横柄な態度で、一人の病人に指示しておいては、さっさと、病気にかかっている別の奴隷のもとへと立ち去ってゆく。…自由民である医者は…病気をその根源から、本来のあり方に則って検査をし、患者自身ともその身内の人々ともよく話し合い、自分の方も病人から何かを学ぶとともに、その病人自身にもできるだけことは教えてやるのです。そして何らかの仕方で相手を同意させるまでには処置の手を下さず、同意させた時でも、説得の手段によって、絶えず病人の気持ちを穏やかにさせながら、健康回復の仕事成し遂げるべく努力するのです。Pl.Lg., IV, 720Cff.

医者は、プラトンが語ったような、自由民の医者のように患者と話し合わねばならない。本稿で医術や医者に関する様々なプラトンのテキストを取り上げたが、初期から中期著作を経て、この後期著作である『法律』での医術理解にまで来てようやく、医術について取りこぼした問題点が総合的に解決されていると解釈したのは Levin である。彼女はプラトンの医術理解を積極的に現代生命倫理の見解と接続させる試みを行っており、その点は大変興味深い<sup>24</sup>。

## おわりに

以上に見てきたように、ヒポクラテス医学文書において示された技術知の内実は、専門知と教養知の両側面の緊張関係の中で、さらにソフィストの活動と近接したかたちで深められていった。言葉は人を動かす力であり、人を癒す力にも重なる。それゆえ力を持つ技術者達が、一般の素人の気づかぬうちにレトリックの力を行使し、意図的に操作可能にする構造になりがちである。医療行為においても、医者が自らの治療を正当化するためのレトリックを用い、言葉を巧みに操作して自らの実践を肯定するよう促す場合が多く見られた。医師の判断は客観的な自然学的立場に立って価値中立的であるかのように見えて、実際

---

<sup>24</sup> 例えば、彼女は素人の貢献に関する Veatch や Brody ら現代生命倫理の議論を、プラトンのテキストを参照しながら考察しており、現代との接点を知る上で有益な情報を提供している。Levin (2014), 252ff.



にはそうではない。それに気づかぬまま身体を医者に委ねる患者は、リスクを背負わされることとなる。それゆえ、インフォームド・コンセントの重要性が叫ばれ、また患者不在の診療に警鐘が鳴らされてきた。そしてヒポクラテス医学思想にも患者の権利への配慮が欠けているとしばしば非難されてきたが、実際は医師と患者の対話における権力構造を問い直す視点がテキストに示されていた。すなわち対話の相互的な関係性の中で、日々自分自身を癒しへと方向づけることを医者が患者に諭している。合理性に基づいて、その知を患者自身の内的規範として根付かせ、患者の身体を患者自らが主体的にケアする知恵を育むことで、その力の所在は患者自身へと移行するのである。この点はすでにプラトン自身が医術教育について「魂の世話」と関連づけて言及していたことでもあり、この「語り」を通して知を主体化することこそがヒポクラテス医学の本来の *paideia* のあり方であった。

#### 参考文献

- Agarwalla, P. K. 2010, “Training Showmanship. Rhetoric in Greek Medical Education of the Fifth and Fourth Centuries BC”, in M. Horstmanshoff(ed.), pp. 73-85.
- Brody, H.1992, *The Healer’s Power*, Yale University Press.
- Ducatillon, J.1997, *Polémiques dans la collection hippocratique*, A diffusion, H. Champion.
- Edelstein, L. 1956, “The Professional Ethics of the Greek Physician”, *Supplements to the Bulletin of the History of Medicine*, 30, Baltimore. [repr. in *Ancient Medicine: Selected Papers*, Baltimore, 1967.]
- van der Eijk, P. J. 1997, “Towards a Rhetoric of Ancient Scientific Discourse: Some Formal Characteristics of Greek Medical and Philosophical Texts (Hippocratic Corpus, Aristotle)”, in Bakker, E. J.(ed.), *Grammar as Interpretation: Greek Literature in its Linguistic Contexts* [Mnemosyne, Supplements, Volume: 171], Brill, pp. 77-129.
- Entralgo, P. L. 1969, *Doctor and Patient*, translate by F. Partridge, Weidenfeld and Nicolson.
- Entralgo, P. L. 1970, *Therapy of the Word in Classical Antiquity*, translated by L. J. Rather, J.M. Sharp, Yale University Press.
- Festugière, A. H. 1948, *Hippocrate, L’Ancienne Médecine*, Klincksieck.
- Horstmanshoff, M. (ed.)2010, *Hippocrates and Medical Education* [Studies in Ancient Medicine, Volume: 35], Brill.
- Jaeger, W. 1959<sup>3/4</sup>, *Paideia: die Formung des Griechischen Menschen*, I-III, W. de Gruyter/ translated from the second German edition by G. Highet , 1986<sup>2</sup>, *Paideia: The Ideals of Greek Culture*, I-III, Oxford University Press.
- Jones-Lewis, M. 2016, “Physicians and ‘Schools,’” in *A Companion to Science, Technology, and Medicine in Ancient Greece and Rome*, ed. Georgia Irby, vol. 1. Chichester, John Wiley & Sons, pp. 386-401.

- Jouanna, J. 1988, *Hippocrate*. Tome V, 1re partie. *Des vents. De l'art*, Les Belles Lettres.
- Jouanna, J. 2012, *Greek Medicine from Hippocrates to Galen*, Brill.
- Kerényi, K. 1956, *Der göttliche Arzt: Studien über Asklepios und Kultstätten*.
- Kleinman, A. 1988, *The Illness Narratives: Suffering, Healing, And The Human Condition*, Basic Books.
- Kudlien, F. 1970, "Medical Ethics and Popular Ethics in Greece and Rome", *Clio Medica*, 5.
- Kühn, J.- H./ Fleischer, U. 1986–1989, *Index Hippocraticus*, Göttingen.
- Levin, S. 2014, *Plato's rivalry with medicine: a struggle and its dissolution*, Oxford University Press.
- Littré, E. 1839-1861, *Oeuvres complètes d'Hippocrate, Traduction nouvelle avec le texte grec en regard*, 10 Tomes, Adorf M. Hakkert.
- Lloyd, G.E.R. 1983, *Science, Folklore and Ideology: Studies in the Life Sciences in Ancient Greece*, Cambridge University Press.
- Lloyd, G.E.R. 2004, *Ancient Worlds, Modern Reflections*, Oxford University Press.
- Mann, J. 2012, *Hippocrates, On the Art of Medicine* [Studies in Ancient Medicine, Volume: 39], Brill.
- Marrou, H.-I. 1948, *Histoire De l' Education Dans l' Antiquite*, Editions du Seuil (H.I. マルー 1985 『古代教育文化史』 岩波書店).
- Maloney, G. Frohn, W. and Potter, P. (ed.) 1986-1989, *Concordantia in Corpus Hippocraticum*, Olms-Weidmann.
- Miles, S. H. 2004, *The Hippocratic Oath and the Ethics of Medicine*, Oxford University Press.
- Pender, S. 2005, "Between Medicine and Rhetoric", *Early Science and Medicine*, Vol. 10, No. 1, pp. 36-64.
- Puschmann, Th., Neuburger, M., Pagel, J. 1902-1905, *Handbuch der Geschichte der Medizin* 3 vols., Gustav Fischer.
- Schiefsky, M. 2018, *Hippocrates On Ancient Medicine: Translated with Introduction and Commentary*, Brill.
- Schironi, F. 2010, "Technical Languages: Science and Medicine", in E. J. Bakker (ed.), *A Companion to the Ancient Greek Language*, Wiley-Blackwell, pp. 338-353.
- Thumiger, C. 2015, "Mental Insanity in the Hippocratic Texts: A Pragmatic Perspective", *Mnemosyne* 68, pp. 210–233.
- Veatch, R. M. 1981, *A Theory of Medical Ethics*, Basic Books.
- 中畑正志 2000 「病の文法とレトリカ」 『古代哲学研究』 32.
- 浜渦辰二 2009 「ナラティヴとパークペクティヴ——「〈かたり〉の虚と実」をめぐって」  
木村敏・坂部恵 監修 『〈かたり〉と〈作り〉——臨床哲学の諸相』, 河合文化教育研究所.
- 藤澤令夫 2001 『藤澤令夫著作集』 VI, 岩波書店.